

高齢者の機能低下を最低限にするための看護連携システムの構築

角濱春美¹⁾、村上純子²⁾、川野恵智子³⁾、柗谷京子⁴⁾、田中雪子⁵⁾、松浦由美子⁶⁾

1) 青森県立保健大学健康科学部・健康科学研究科、

2) 青森県立保健大学健康科学研究科博士後期課程、

3) 八戸市立市民病院、4) 医療法人平成会八戸平和病院、

5) 財団医療法人謙昌会総合リハビリ美保野病院、

6) 公益財団法人シルバーリハビリテーション協会メディカルコート八戸西病院

Key Words ①高齢者 ②機能低下防止 ③看護連携システム

I. はじめに (または「緒言」等)

現在の日本の地域包括ケアシステム、及び地域医療構想では、疾病が発症して回復し自宅に退院するまで、複数の病院や施設を経由する。これは、それぞれの病院や施設が役割を分担することによって、高度で効率的な医療提供が可能になるという利点がある。

しかし、特に高齢者では、病院、施設、在宅を行き来するうちに、日常生活機能が低下する事例が散見される。この課題を解消し、地域包括ケアシステムを有効に運用するためには、それぞれの施設間の連携が重要であると考えられる。本研究では、青森県八戸市地区の主たる病院看護部と連携し、高齢者の機能低下を最低限にするための看護連携システムを構築する目的で研究を行った。

II. 目的

本研究の目的は、高齢者の機能低下を最低限にするための看護連携システムを構築することである。平成 29 年度は、施設間人事交流事業を行い、課題の抽出及びその効果を検討した。

III. 研究方法

1. 対象：本研究に参加している八戸地域の病院に所属する看護師（主に師長、主任）83 名
2. 対象施設：本研究に参加している八戸地域の病院、及び同法人が運営する老人保健施設、在宅訪問看護施設

3. 期間：平成 30 年 1 月～2 月

4. 人事交流の内容と方法

人事交流事業に参加する対象者を看護部が選定する。個人から見学したい施設の希望を募り、マッチングした上でスケジュールを作成した。方法は、1 日間、他施設看護師にシャドウイングし、施設の見学、ケアの見学と参加、疑問点の聴取を行った。

5. データ収集方法

フォーカスグループインタビュー法により、データ収集を行った。

インタビュー内容は、施設間連携で気づいたこと、連携の在り方とし、自由な討議を促した。

6. 分析方法

インタビュー内容を逐語録にし、内容分析の手法を用いて分析した。

7. 倫理的配慮

連絡先：青森県立保健大学 〒030-8505 青森市浜館字間瀬 58-1

Email h_kadohama@auhw.ac.jp

本研究は、青森県立保健大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号 1740）。

V. 結果

施設間人事交流研修が始まる前に調査協力者を募集し、76名から同意が得られた。

1. 【機能低下を防止するための看護の課題】

細やかなアセスメントをもとに、なるべく身体拘束を最小限にする「身体拘束をしない看護の実現」、患者の残存機能を維持するために、「最後までトイレでの排泄」が抽出された。

2. 【地域包括ケアシステム、連携システムへの課題】

医師の説明や、家族の望み、ケアについて「情報が途絶えない記録・サマリーの必要性」、回復期病院なら回復できる、といった患者の過剰な期待を誘う「連携病院の役割の正しい理解と説明」、「医療処置を行った後の生活の影響の説明」の必要性と重要性が語られた。

3. 【自施設の役割・強みの認識】

急性期病院として「命を守りつつ機能低下を最小限にした効果の自覚」がされていた。他施設の看護をみることで「適切な看護への保証」を得ていた。回復期病院では、患者の生活に密着した看護が提供できている「生活に寄り添う看護の自覚」が生じ、「他職種連携により生まれる効果の自覚」を持っていた。

4. 【連携施設への信頼感】

急性期病院看護師は、自分たちの施設に入院していた患者が生き生きとリハビリに取り組む姿を見て「患者の転帰についての信頼感」を得ていた。また、「在宅看護の可能性の広がり」への気づきがあった。回復期病院看護師は「命を守る体制」、「患者の退院後を初期から見据える」ことで、急性期病院への信頼感が増していた。

5. 【看護の変革】

「身体拘束の早期解除」、「膀胱留置カテーテルの早期抜去」、について、他施設の取り組みを見て、自施設ですでに導入を始めていた。また、転院先を実体験したことにより患者への「自信を持った具体的な情報提供」が行われていた。感染防止行動について「違いはあるが、自施設で行える限界」を査定していた。他職種との情報共有が有効にできている様子から「他職種連携方策の改善」について考え、取り組み始めていた。老人保健施設等で、使用できる物品やコストを考えてケアをしていることから、「コスト意識の醸成」ができ、実践が行われていた。

VI. 考察

看護連携の課題としては、【機能低下を防止するための看護の課題】、【地域包括ケアシステム・連携システムへの課題】が抽出された。今後は重点的に取り組むべきことについて議論し共通に実践していく必要があると考える。人事交流研修は、連携の課題を抽出することを目的に行われた。しかしながら、【自施設の役割・強みの認識】、【連携施設への信頼感】、【看護の変革】という、看護師の認識と行動の変化という成果を生んでいた。これは、各施設の看護が抱える問題解決につながり、円滑な連携にプラスに働く要素である。このような人事交流を行うこと自体が、連携システムの中に組み込まれる必要があると考えられた。

VII. 発表（誌上発表、学会発表）

角濱春美、村上純子：ようこそ！保健大学研究室～重点課題研究発表会～高齢者の機能低下を最低限にするための看護連携システムの構築，保健医療福祉研究発表会，2017. 12